

松下幸之助記念財団 研究助成

研究報告

(MS Word データ送信)

【氏名】 松岡 佐知

【所属】(助成決定時) 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

【研究題目】

発酵が内包する多元性を活用する応用人類学的研究：インド社会における薬用酒を事例に

【研究の目的】(400字程度)

インドの薬用酒は、その製造法や効能についての自然科学研究はあるが、社会文化や生態環境という地域固有性も含めた包括的な研究がほとんどない。インドでは、一般に酒類は不浄なものとされ、新鮮でない食品は非衛生的とされるにも関わらず、発酵された薬用酒は生活や文化に根差して重宝されている。発酵という物質の性質が変容する現象に対する人々の認識や社会における位置づけ、文化的な加工技術、原材料を育む生態環境の三点の連関に注視して、地域性と紐づく発酵について、インド社会にとっての薬用酒を事例に地域研究を行う。

人類の生存に密接に関わりながら、それぞれ個別に議論されてきた「社会、文化、環境」について、発酵は横断する形で関連づけられる。地域という枠組みの中で発酵を包括的に分析することにより、「社会、文化、環境」の関係性を考察し、その結果を自然科学の微生物学理論で説明する発酵と融合し、人と自然のつながりを示す一般向け説明向けモデルの構築を目指す。本研究はそのためのファーストフェーズにあたる。

【研究の内容・方法】(800字程度)

報告者は2012年から、博士研究として南インド社会での伝統的治療師のあり方に着目し、フィールドワークを行った。この研究の中で、薬用酒が土着の醸造プロセスを経ることで、その土地の人々にとっての「人と自然」の媒介として存在していたことを明らかにした。薬用酒は、多孔質な素焼きの甕に材料をいれ、土中に一定期間埋めて醸造される。その醸造過程がその地域の生態系との繋がりを象徴し、「人と自然が離れると病いがやってくる」と言う伝統的治療師に「薬用」として用いられていた。単に化学的な性質が変化するだけでなく、その醸造という過程があるために、「薬用」という社会的な意味付けがなされていた。さらに、一般通念である酒の不浄さや“古さ”は問題とされていなかった。つまり、発酵生成物はその土地と連関の中でのみ存在し、その特徴的な繋がりが薬用酒に地域独自の価値を生んでいたといえる。また発酵プロセスにおいては、多種多様な微生物群の共存が不可欠で、ある菌種の生成物により温度やPHが変化すると主に活動する菌種が他に変わることで、熟成されていく微小生態系である。つまり、発酵という現象は自然科学で説明がなされるとともに、その実践については自然環境の影響を受けながら文化的な行為の上に成り立つと考えられた。

その結果をふまえ本研究においては、以下の3つの課題を設定した。一つ目として、文化的行為(加工技術の詳細とその変遷と多様性)、二つ目として社会的文脈(発酵の捉え方、経済や近代化、疾病構造との関係など)、三つ目として生態環境(原料の入手元の変遷、季節・気候との関係)とした。そして、その三点の連関について考察中した。ただし、インド国内2地域におけるフィールドワークを行う計画であったが、調査対象地のひとつであるケーララ州が調査中に大洪水被害に遭遇したために中断を余儀なくされ、助成期間中に全計画を終えることができなかった。

【結論・考察】(400字程度)

調査を行った北インド山岳部と南インドは、自然環境だけでなく、信仰や文化的背景も大きく異なる。両

方の地域で、一般にアルコール飲料に対し嫌悪感が示されるにもかかわらず、薬用酒は一般に普及し、利用されていた。非公的に家内で製造されている例も確認できた。両地域における薬用酒は、インドの伝統医学であるアーユルヴェーダで利用される *Arishta*, *Asava* と同様に、複数の薬用植物と糖分を混ぜ、42 日程度、醸造するものであった。原料に使われる植物や醸造に適した環境の設定などは、地域の自然環境に大きく影響を受けていた。また、南インドの方が慢性疾患をもつ者が比較的多く、疾病にあった薬用植物や薬用酒が選択されていた。発酵についての知識は正確な科学的な知識を持つものは少数であり、薬用酒と地域で流通している蒸留酒との区別についても科学的に説明できるものは少なかった。ただし、前述した通り、両者に対する印象は大きく異なり、その差異は薬草存在とアルコール度数の差で語られた。また、アルコール飲料を好む者が薬用酒を好む傾向は見られなかった。自然環境に適した薬用酒がその土地で培われた方法で醸造され、アルコール飲料とは全く別の文脈で存在していたと言える。